

---

# 三国志 呂布伝

ノブナガ・o

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

三国志 呂布伝

### 【ノード】

Z3849F

### 【作者名】

ノブナガ・〇

### 【あらすじ】

洛陽から去つた最強の将呂布はすでに忘れられた存在に。だが、軍師陳宮は呂布に会見する。呂布は陳宮と共に再び表舞台へ。

## エン州の戦い

かつて、最強といつ名をほしにした将がいた。虎牢関の戦いであまたの有名、無名の将を斬り、関羽、張飛といふ、猛将二人を相手にかつて無いほどの名勝負を演じ互角以上に戦つた将がいた。彼の名は、呂布（奉先）。敵の大将であつた袁紹は呂布を評してこう言つたという。

『人中の呂布、馬中の赤兎』どんな猛将といえど呂布に勝るものはなし、どんな名馬といえども呂布の愛馬、赤兎のように速い馬はない。という意味である。現に、呂布は猛将ぞろいの董卓軍において無類の強さを誇つていた。だが、彼は董卓亡き後、長安にて政争に敗れ、都落ちしていた。もはや呂布の噂をするものはいない。群雄も最強の将呂布を探し求めるということはしなかつた。

呂布は裏切りの将でもあつたのだ。かつて主君であり、また養父でもあつた丁原を斬り、また董卓をも裏切つていたのだ。

反董卓連合に加盟していた各地の群雄達は解散し、己の領域を拡大することと、優秀な人材を集めることに苦心していた。冀州の袁紹、幽州の公孫サン、エン州の曹操の名が各地で聞かれるようになつた。

徐州に陶謙というものがいる。彼は名君ではなかつたが、徐州といふ肥沃な土地に恵まれて、戦乱に巻き込まれることもなく領地を治めてきた。

だが、西暦一九三年、この年徐州の地は大戦乱に巻き込まれた。

ことの起こりは、エン州を治めた曹操が、徐州に住む己の父を迎えようとしたことから始つた。これを知つた陶謙は、この機に曹操と誼を結ぶべく、エン州までの護衛をかつてでた。

だが、護衛を勤めていた兵の一部が曹家の財宝に目がくらみ曹操の父を殺し、財宝を持ち逃げしてしまつたのだ。これを聞いて激怒した曹操は、陶謙を滅ぼすべく徐州に侵攻したのだ。

曹操の怒りは凄まじく、それは兵の間にまで及んだ。曹軍の通つたあとは何も残らず、草木は枯れ、河は屍で埋められた。村を襲い、女を犯し、殺戮を繰り返す無秩序なその軍はまるで、かつて民を恐怖させた黄巾党のようであった。もちろん陶謙は弁明の使者を派遣した。だが、怒り狂つた曹操は使者をことごとく斬り捨て、陶謙に無言の圧力をかけた。

もはや、この軍をとめる術はないと・・・。

陶謙の幕下には、曹操軍をとめられるような勇猛な将はいない。ましてや、命をかけてまで使者の任を務めるようなものもいなかつた。なす術のなくなつた陶謙は、居城に籠もりひたすら曹操が兵を退くのを願うしかなかつた。

曹操の悪行は、幽州の公孫サンの元で密将をしていた劉備の耳にも届いていた。

「民を殺め、土地を荒らすことは戦ではない。曹操の悪行、止めねばならん。」

そう言って、劉備は公孫サンの許しを得、義兄弟の関羽・張飛をつれ徐州へ急いだ。

その手勢一千弱、これが曹操と劉備の長きに渡る戦いの始まりとなつた。

ここに、一人の才子がいる。名を陳宮といつ。

以前は、曹操に仕えていたが、此度の徐州攻めを諫め聞き入れられずそのため、野に下つた。陳宮は、曹操をかつて都で専横を奮つた董卓と同じ類のものとみたのだ。

そのため、曹操に対抗すべき群雄を必要とした。

そして、陳宮が選んだ主君は呂布であった。冀州で名をあげ随一の勢力を誇る袁紹や、荊州にて一大勢力を築いている劉表などではなく、よるべき土地もなく、すでに誰もが存在を忘れていた呂布であった。

陳宮は呂布が潜伏しているといつ、ある村を訪れ呂布と会見した。

呂布は森に住んでいた。正確には、その森の奥の古びた小屋である。

「ん、誰だお前は？」呂布が陳宮を見て初めて言つた言葉がこれである。（これが人を遇する態度か？俺はお前の軍師となる男だ）そう、陳宮は叫びたかった。このとき、陳宮は呂布をただ勇猛なだけの将だと思っていた。自分の才があれば、天下に名を馳せ、州の一つや一つは簡単に手に入るだろうと。だが、違つていた。

「陳宮と申します。中華はこれほど広いのに將軍はどうしてこのようない僻地におられるのです。天下にあまたの人あれど、將軍に勝るものはないません。ですが、將軍は兵少なく・・・」陳宮はくる途中考えてきた呂布への口説き文句を、長々と語るつもりだった。知者には多弁なものが多い。そうでなければ、人を説くことなどできない。だがそれが、呂布の癪にさわった。

「何が言いたい。」陳宮の言が終わらぬうちに呂布が不機嫌をあらわにした声音で言つた。

「はい。この陳宮、呂將軍にお仕えすべく・・・」

「貴様に何ができる。」呂布は、また陳宮の言をさえぎつた。

「知恵がございます。」

「知者は嫌いだ。何の役にもたたん。」呂布は吐き捨てるよつて言った。すでに、その鋭い眼光は陳宮を捉えていない。だが、陳宮は続けた。

「我が才と將軍の武をもつてすれば、天下を治めることなどいた易いことです。將軍、どうかこの陳宮の言をお聞きください。」呂布は再び陳宮を見た。だがその眼には殺氣すらこめられていた。

「陳宮殿、將軍は氣の短いかたでおられる。」側近が氣を利かせて陳宮に囁いた。恐らくこのまま喋り続けていたら、陳宮は殺されてしまう。呂布は呂布の氣を引くべく話題を変えた。

「將軍、陳留に食糧があります。」

「それを奪うのか？」

「いえ、陳留太守張穆に分けてもらひます。」

「張穆とは誰だ？」

「張穆は・・・私の友人です。」陳宮は言葉を選ぶようになつてい

た。呂布相手にはこのほうがいいと思ったからだ。

「友か。友はいい。」そういうと呂布は、赤兎馬のたてがみをなで、これまでみたことのない穏やかな表情を見せた。

（ふつ、少し手間取つたがまあいい。これで、曹操とやりあえる。）  
だが、陳宮はまだ呂布という人物を理解していなかつた。  
さて、徐州である。

曹操の徐州侵略から数ヶ月が過ぎたころ劉備軍はようやく徐州に着いた。そのころ、すでに曹軍は徐州における主な城を攻略していく、全軍が陶謙の籠もる下amp;#37043;に進軍していた。  
「劉玄徳、陶謙殿の救援に参りました。」その声を聞いたときの陶謙の喜びよつは凄まじかつた。たかが一千弱の劉備軍でも援軍にきてくれたのが嬉しかつたのか、それとも関羽・張飛という豪傑の参陣が嬉しかつたのか、ともかくすこいはしゃぎようであつた。

「劉備殿、どうかお願ひにござります。曹軍をしりぞき、そしてこの老いぼれの代わりに徐州の長になつて下さい。」これには、陶謙の家臣のほうが驚いた。陶謙には世継ぎもいぬし、ましてや劉備と陶謙には何のつながりもない。

「申し訳ありませんが、この玄徳そのような器ではありません。それにこれでは、民草に徐州欲しさに援軍にきたと思われてしまします。」と、劉備は再三辞退したが陶謙はききいれてくれない。

「何を遠慮することがある。さつさともうつちまえばいいんだ。」  
と、張飛が呴く。

「まあそう言つな、兄者には兄者の考えがあるのだ。」関羽も張飛と同じ考え方なのである。顔を曇らせ一人のやり取りをじれつたそくに見ている。だが、張飛のよつに暴言を吐くことはしない。共に天下を望んだとき、この御仁についていこうとそう決めたのだから。そういうするつたりするつたり、曹軍は下amp;#37043;まで迫つてきた。ならば、まずは曹軍を退けよつと劉備らが城を出たとき、曹軍はすでに退却していた。

何故、曹軍は退いたのか。無論、劉備軍に怯えたからではない。呂

布にエン州を攻められている、という報せをつけたからである。

陳宮の言に従い、陳留にて兵氣を養っていた呂布軍は曹操の徐州侵攻の隙をつき、エン州を手に入れようと動き出したのだ。

だが、順調かと思えた陳宮の作戦であつたが、思わぬ誤算が生じた。イナゴの大群の襲来という災害にあり、秋の収穫が期待できず兵糧不足に陥ってしまったのだ。

「陳宮どうするのだ。これでは我が兵は餓死してしまうではないか。」

「呂布はエン州・濮陽城にて主な武将を集め軍議を開いていた。

「心配いりません、將軍。兵糧不足は曹操とて同じ、むしろ兵の数が多い曹操軍のほうが深刻な問題となっています。」

「そりは言つが……」武勇に秀でた呂布でも、作戦のこととなるとからつきし駄目なのだ。

この戦場をこよなく愛する男は、戦う為の知恵などもちあわせていない。ただ、正面から突撃して「己の武勇をふるつ」と、それが呂布の戦い方だから。

「兵の士気が高いうちに、曹操の居城をつくべきではないか?」といふ者もいる。通常、城攻めは少なくとも城兵の3倍の兵を必要とするといわれている。その上、長期戦を覚悟しなければならない。兵の数、兵糧ともに少ないこの状況でどうしてこのようなことが言えるのか? (呂布の家臣は皆こんな奴ばかりなのか) 陳宮はつくづく呆れる思ひがした。とそこく、

「將軍いつそのことエン州を捨てて他へ移つてはどうでしょうか?」と、進言するものがいた。(ほつ、このものなかなか面白いことを言つ。確かに、張遼と言つ名だつたか) 陳宮はちらつと、張遼のほうへ目をやつた。確かに腕力ばかり自慢している呂布の家臣(無論呂布も含む)とは違つた印象を受ける。

「エン州を捨てるか……陳宮どう思つたか?」呂布にとつてエン州とはどれ程の価値があるのか? 兵糧さえあれば、いつでも陥とせる程度にしか思つていないのだろうか? 陳宮はしばらく考え込んだ。

「陳宮!」呂布は長考を嫌う。

「はっ、將軍はここを捨て他の群雄の下につくことを望みますか？」

それを聞いた呂布の表情は一変した。

「こいつの俺が誰かの下につくだと？貴様死にたいのか！」朱になつた

その顔からは殺氣すら感じられる。

フツ。陳宮は微かに笑みを浮かべた。無論、呂布に気づかれないようこいつ（どうやら私はこの將軍を育てなければならぬようだな。）

「恐れながら申し上げます。」陳宮は、わざと怯えた体をみせつつ発言した。

「こいつのエン州において、將軍と曹操の名声、評判は比べるまでもなく、その上長期戦となれば不利になるは明白です。」呂布は、陳宮を凝視している。今回はいくら呂布でも陳宮の言を無下にするつもりはないようだ。

「こいつの陳宮、あえて申し上げます。我が策受け入れてくださるのであれば、こいつの首離れても悔い無しと。」その言葉を聞か、呂布の心は動いたようであった。

「知者でも己の命を賭けるのか？」

「戦場にあつては、知者も勇者も命を賭けることに違ひはありません。」呂布は再び陳宮を凝視した。陳宮の目からは揺るぎ無い覚悟が感じられた。

「その意気やよし、陳宮お前の策に従おう。我が軍がこの精銳をもつてお前の智に応えてやる。」策の内容も聞かずに採用するのは、いかにも呂布らしい。が、なにはともあれ陳宮は呂布の信頼を得、軍師という立場につくことに成功したのだ。

一方エン州の大半を失つた曹操は濮陽の北東のケン城にいる。そこへ、呂布軍がケン城に向かつて進軍しているという報せが入つた。

「ふつ、呂布らしい。力ずくでケン城を陥とそうとこいつのか」と、夏侯惇。

「しかし、たとえ呂布でもここの城を容易く陥とすることはできませんまい。」と荀？。

「殿、ここは籠城の一手です。呂布軍の兵糧の尽きるをまち、敵が

退却したところを一気に討つべきかと。」と程々。曹操は、各自の意見を考慮した上で、軍師郭嘉に問うた。

「郭嘉、お主はどう思う?」

「はい、確かに陳宮が呂布の軍師になつたと聞いています。今までの呂布と同様に思われぬほうがよろしいかと。」

「つむ、儂もそう思つていたところだ。」

曹操は軍師郭嘉の言を聞き満足げに頷いた。と、そこへ再び報せが入ってきた。なんと呂布軍は進路を変え、北上しだしたというのだ。ケン城を北へゆけば、冀州の袁紹領になる。

「うーむ、呂布はケン城を諦め冀州の袁紹を頼るといつことですかな。」

「そう単純な話ではあるまい。」のままでは我らは呂布にエン州を荒らされ、その上なんの報復もせず奴らを逃がしてしまつことになるのだぞ。殿、どうか呂布追討令を。」と、夏侯惇が息巻く。

「つむ、確かにこれでは民へのしめしがつかぬ。陳宮の用兵もみておきたいしな。出陣のしたくをし。」と、曹操が命を下した。だが、そこへ

「お待ち下さい。」とそれをとめる者がいた。軍師郭嘉である。

「どうした。郭嘉。」

「はい。これは陳宮の罷でござります。我らをおびきよせ野戦にて決着をつけるつもりなのです。」

「つむ、郭嘉の言も分かるが、一度あつたてみねば敵の力量もわからぬだらうからな。」曹操が考えこむようにして言つ。これは、曹操自身も危惧していたことである。兵数が少なくとも、野戦ならば呂布軍にも分があるからだ。

「されば、軍を二つに分け、一方を呂布軍の後方に、もう一方を迂回して呂布の先方をつくよに編成してください。」

「挟撃、か。郭嘉殿は、少し陳宮に拘りすぎているのでは。」

「荀?殿こそ、陳宮を甘く見すぎています。陳宮が殿の下を離れ、呂布についたのも確たる勝算があるからこそです。」それを聞き荀

？の表情は一変した。

「されば郭嘉殿は、殿よりも呂布のほうが上だといつのか。」と荀？がつかみからんばかりの勢いで言つ。語氣が多少荒くなつてきている。

「少なくとも武勇において呂布に勝るものを受け取らせては知りません。」

「郭嘉殿。」荀？が郭嘉を凝視する。他の将も、戦の前に敵を恐れるこの軍師に不快感を抱いている。この場にいる多くの将が、郭嘉を睨みつけているが当の本人はそれを少しも気に留めていないようだ。場が緊張を帯びる。すると、

「ハツハツハ。郭嘉殿は相変わらず言いたいことをズケズケと言つわ。」夏候惇の豪快な笑いで荀？の怒気がそがれた。こういつところが、夏候惇が曹操から絶対的な信頼を得ているゆえんなのだろうか。他の将ではこうはいかない。

「うむ、では郭嘉の言を採用しよう。夏候惇、お主は後方から呂布にあたれ。儂は別動隊を率いる。荀？は夏候惇に、郭嘉は我が隊に加わるよう。」

曹操の決定の元、曹軍が動き出した。夏候惇率いる本隊は城外を出、呂布の後方を突くべく進軍していた。

「夏候惇殿、油断は禁物ですぞ。」

「荀？殿、陳宮など恐るるに足りぬ相手なのでは？」荀？だけではなく、多くの将が陳宮を軽視している。曹操の才能を見出せず呂布につくなど愚者のすることだと思つている。

「私は、そう思うのですが郭嘉殿があれほど気にかけていますから。何かあるのかも知れません。」夏候惇が口元に笑みを浮かべる。

「俺はてっきり、荀？殿は郭嘉殿を嫌つていると思つていたのだが。

「ええ、嫌いです。ですが、あの者の才は認めています。」

「フツ」

「おかしいですか。」

「いや。智者といつのは己の感情がないものだと思っていたからな。

「確かに軍師たるもの、好悪で物事を判断すべきではありません。ですが、情がないとはあまりにひどい。」荀?が夏候惇を恨めしげに見た。武人と文官の友情といつもの滅多にないのだが、この二人はこれよりのち深い友情で結ばれることになる。

馬の蹄の音、大地が揺れるような感覚、行軍のなかでも呂布には分かつた。後方から敵が近づいていることを。ここに陳宮はいない。「將軍、あまりはりきり過ぎて敵を敗走させないように。これはあくまで第一段階なのです。武勇に頼つて策を台無しにせぬようにお願い申し上げます。」陳宮がくどいくらいに言つていたのを思い出す。確かにまわりの武将はあまりいい顔をしていなかつたはずだ。（ふつ、俺はそれほどまでに無謀な將に見えるのか？）そしてふと笑みを浮かべる。それから、

「全軍反転せよ、敵を打ち破るぞ。」と号令し、自ら先頭にたつて駆けていった。呂布はことじことく敵兵を斬り捨て敵陣深く入つてゆく。付き従うものはわずかしかいない。己の武勇を誇るかのようなその行為は陳宮の言などとうに忘れていたのかのようであった。

「フッ。さすがは呂布よ。」

「夏候惇殿、夏候淵殿と共に呂布を止めて下さい。」

「承知。荀?殿は軍の指揮を頼む。」そう言つて夏候惇はかけていた。

「呂布よ、兵卒を相手にしてもつまらないだろ?。」と、夏候惇。

「我らが相手になつてやろう。」と夏候淵。

「二人がかりでくれば勝てると思つたか。笑止。」と、呂布。夏候惇と夏候淵の矛が同時に呂布に迫る。

だが、呂布はそれをものともせず、自慢の奉天画戟でその両方を受け、はじきとばした。並みの武将ならばその勢いのまま落馬していただろう。が、二将は巧みな手綱をばきでこれを逃れる。

しかし、それもつかのま、呂布の戟が夏候淵を襲う。青い火花が散る。そこへ、夏候惇が後ろから斬りかかる。呂布相手に二対一だの

卑怯だなどといつてられない。そうしなければ、自分がやられてしまつのだ。

「邪魔しあつて。」呂布は、器用に夏候惇の攻撃をよけ、少し間合いをとつた。

もともと、この一将を殺すつもりはない。陳宮の言つよひにこに曹操はいない。だとしたらこの一将を斬り、敵を敗走させるのはまずい。

しばらく睨み合いがつづいた。どちらも手をだせないのだ。

緊迫した空氣が流れれる。

とそこへ、ピューンといつゝ鋭い風きり音と共に一本の矢が！

流れ矢だらうか？

ほんの一瞬のことだつた。

刹那。

夏候惇の左目に矢が！

これは、流れ矢などではない。狙つて射たものだ。すると、呂布の後方から

「敵将討ち取つた。」と、叫ぶ声がした。方角からして間違いなく夏候惇を狙撃した者の声であろう。夏候惇は左目に突き刺さつた矢をもろともせず、腰の短刀を抜き声の方へ投げた。短刀が真直ぐ飛ぶ。

「グエッ」意外と近くにいたのかもしれない。その者の最期の声は呂布にもはつきり聞こえた。

敵も味方も夏候惇を注視している。戦場で片目を射抜かれ平然とたちつくしているこの将を。

夏候惇は目につき刺さつた矢を、己の眼球ごと抜きとつ、こゝに言つた。

「親からもうつたこの五体、どうして捨てることができよつか。」

なんと、夏候惇は己の眼を喰つたのだ。これには、さすがの呂布も驚いた。

「惇兄、ここはいつたん退いて手当をしたほうが。」そう言つて、

若干振り返った夏侯淵は我が軍を疑つた。後方に土煙が、そして『呂』の旗印が迫つてきていた。

同じ頃、後方で軍を指揮していた荀？もこの異変に気づいていた。

「敵の援軍か、郭嘉殿の予感があたつたか。だが、こちらとて・・・。李典殿、援軍の抑えをお願いします。」 そう言つと、荀？は手勢を引きつれ前線へ向かつた。

陳宮は、兵と共に森に身を伏せていた。（曹操を知るものは我を置いて他になし。）陳宮は曹操が軍を一手に分けることも、奴が本隊ではなく別動隊率いるということも読んでいた。この戦いにおいて、呂布軍の勝利は間違いないが、陳宮の勝利は曹操の首を取ることである。そのため、自ら伏兵を率いて曹操が表れるのを待つてているのだ。

数刻前、陳宮が呂布に授けた策はこうである。

「將軍、まず我が軍はケン城を攻めると見せかけ北上します。」 呂布、その他の武将は地図を見、陳宮の策を頭に入れしていく。

「張遼殿はケン城手前の林に伏せ、敵が呂布軍の後方を突いたのち挟撃してください。」 辺りを見回し、一息ついてからさらにつづける。

「恐らく曹操は、迂回して我が本隊、つまり呂布軍を挟撃するつもりでしょ。私は、ケン城北東の森に兵を伏せ曹操を側面から攻撃します。その際、將軍は少數精銳を率いて反転し、曹操の首を獲つてもらいます。」

「なるほど、敵の動きを読んだ上で我らが常に先手をとる、というわけですね。」 と、作戦を真っ先に理解した張遼が言つ。しばらくして、他の将も理解していったようだ。

（これで勝てる。）このとき、陳宮はそう確信した。その陳宮の前を、曹軍が通過していく。

（まだだ、まだ。）

逸る心を抑え、そのときをまつ・・・。

「今だ、撃て！」 声と共に、兵は一斉に矢を放つ。曹軍の兵がバタ

バタと倒れていぐ。陳宮は、森の中にあらかじめ選んでおいた狙撃手を残し、曹軍の側面へ襲いかかつた。兵を指揮しながら曹操を探す。

(ビード、ビードにいる曹操。)

・・・いた。屈強な武将に護られ、ひとりわ田立つ派手な鎧を身につけている。間違いない奴だ。

陳宮はできるだけ大声で叫んだ。

「曹操、私は陳宮なり。かつておまえに仕えたが、その残虐さに余るものあり。故に、貴様の元を離れた。曹操よ、己の器をわきまえよ。わざと我が君に頭をたれたらどうだ。そもそも、その首、胴から離れることになるぞ。」陳宮に負けじと曹操も大音声をあげる。

「おひ、陳宮ではないか。儂の元を離れ呂布に仕えたということは、呂布にその器を見たということか？」隣で郭嘉が表情を曇らせるのを知つてか知らずか、曹操は陳宮に問答をしかけた。

「中華広しと言えど、我が君の武勇に勝るものはなく、曹操の残虐さを知らぬ者はいない。我が君がエン州を攻めたのは、徐州の民を救うためであり、我が君の民草を想う気持ちを知らぬ者はいない。お前はどうだ。私心によつて徐州を荒廃させ、罪なき民を苦しめた。どちらが正でどちらが邪か、明白である。」

「殿。」郭嘉が曹操を促す。こうしていふ間にも曹兵は次々と倒されていぐ。

「うむ、そうだな。陳宮よ、お主の兵法しかと見せてもらつたぞ。次はこうはいかぬ。」そう言つと、曹操はケン城へと逃げていつた。陳宮が足止めをして、時間を稼いだにもかかわらず呂布はまだ来ない。（將軍は何をしておられる。）こうなれば自ら兵を率いて、曹操を討つしかない。と思つたとき、ようやく呂布が現れた。

「陳宮、曹操は？」

「あそこにてー」と陳宮が指さす。丁度ここからケン城までの中間ぐらである。呂布の愛馬・赤兎ならぬに追いつける距離である。

呂布は赤兎に鞭をいれ、曹操を追つた。

実は、呂布が遅れたのには理由があつた。張遼の軍が夏侯惇の後方にいた時に呂布は反転して、高順と合流し曹操の元へ向かうつむけだつた。

だが、呂布は突出しそぎていた。すでに周りは敵兵に囲まれている。呂布に代わり本隊を指揮している高順のところまでは、余りにもかけ離れていたのだ。

そして、そこへ荀?が合流したのだ。呂布は荀?の巧みな用兵に阻まれ、高順との合流にてまどつてしまつたのだ。

呂布は、曹操を追つ。今度は郭嘉が、それを阻む。迫りくる矛をかわし、飛来する矢を戟で振り払い、兵卒には目もくれず、ただひたすら曹操を追つ。

曹操の傍らには屈強な武将がいた。陳宮とたいじしていたときのあの男である。男は、これでは追いつかれると思い馬首を返し、呂布へと向かつた。男は下馬し、両手をひろげ叫んだ。

「呂布よ!」の先一步も通さんぞ。」その男は、右手に大きな戟を持っている。おそらく、呂布の奉天画戟と同じくらいの大きさであろう。それを思いつき振り回し、馬ごと呂布を斬ろうとした。

「オリヤー!」下段から振り上げられたその戟は、そのまま赤兎の首を真つ一つに切るかと思われた。

閃光。

呂布は愛馬をかばい、その戟を己の戟で受けた。が、いかんせん体制が悪かつた。そして、何より男の力が予想以上に強すぎた。呂布はその衝撃で落馬してしまつた。

これで、五分である。男はこれを狙つていたのだ。自分の馬は赤兎ほど速くないし、何より屈強で体格のよすぎるこの男は馬術が苦手であった。だからこそ、下馬して呂布に挑んだのだ。

「貴様、なかなかやりある。名を聞こうか。」起き上がつた呂布が言つ。

「我が名は、典韋。その首もらい受けける。」そう言つと、典韋は戟

を振り下ろした。

ガチッ。

火花が散り、戟と戟が交差する。どうやら力では典韋の方が上のようだ。

だがそこは呂布、不敗の将である。呂布は受ける力を少し弱め、わずかに身を引いた。すると勢い余った典韋が、前のめりになつた形でバランスを崩した。そこで呂布は戟を返し、典韋の左腕を切りあげた。

腕が宙を舞い、鮮血と共に地におちた。

「なあ、典韋。俺に仕えぬか。その腕ではもう俺を倒せまい。」と、

呂布。

「フツ、笑止。我が主は、曹操様ただ一人。」と叫び典韋が戟を振るつ。呂布はそれを難なくかわし、赤兎にまたがつた。

「どういうつもりだ。」

「もはや、まにあうまい。」そう言つと呂布は退却した。天下に人物を愛するものは数多いるが、呂布ほど武勇の将を愛するものもないだろつ。

呂布は典韋の武に惚れ、矛を収めたのだ。

戦はこの後、曹操軍が撤退を始め、呂布軍の大勝に終わつた。だが、曹操には逃げられた。

陳宮にとつてこの戦は、勝戦ではなかつた。

「将軍、今宵はこの地で野営しましよう。」と、陳宮がケン城からさほど離れていない平地を指しいう。

「かの地で我が軍の勝利を祝い、曹操を挑発するというのですか。」

と、張遼。

「恐らく曹操は夜襲をしかけてくるでしょう。我が軍はそれを迎え撃つのです。」この夜襲軍に曹操がいる可能性は低い。ましてや、このような挑発にのるかどうかも疑わしい。

だが、地の利のないエン州を根城に曹操と戦うのは不利である。ならば、たとえ可能性が低くともここで曹操を討つのが最良だと考え

たのだ。だが、

「好かん。」この一言で陳宮の策は却下された。

陳宮の目が点になる。

(今、何といった？)

「將軍？」

「俺はそういうやり方は好かん。」耳を疑うような言葉がはつきりと聞こえた。

(嫌いだから?だから採用しないのか。だいたい、何故あの時曹操の首を獲つてこなかつた。)陳宮はだんだん腹がたつてきた。

「將軍、戦は好き嫌いでするものではありません。」だが、呂布は陳宮をうつとうしそうに見、

「張遼、あの片田にあつたか？」と聞いた。

(片田？何のことだ。)陳宮には皆田見当もつかない。だが、「はい、あの将はなかなかの豪のものですな。武人とはあるようなものを語つのでしょうか。」と、張遼。

「俺も、曹操を追う途中なかなかの強者にあつたぞ。仕えんかと誘つたが、断られてしまつたわ。」と、心底悔しそうに言つ。(呂布は所詮呂布なのか。戦というものを全く理解していないではないか。)

陳宮に、一抹の不安がよぎつた。だが、それは一瞬のことだった。

「將軍、ならば兵を休ませた後、徐州へいきましょう。」この言ひて、呂布軍は徐州・劉備の元へと進路をかえた。

呂布が下ヒで劉備に会つてから、数日が過ぎた。その間、劉備は呂布を賓客の如くもてなしていたが、その一方で呂布の処置に困っていた。

劉備軍には、武勇の将はいても、軍師と呼べるものはいなかつた。(さうしたもののか。呂布を放てば過日必ず敵となるだろう。かといって、この玄徳に呂布を従えるだけの器があるか。) そなある夜、呂布は酔つて暴言を吐いた。

「劉備殿は、曹操から徐州を護つたため徐州牧となつたようだが、曹操が兵を退いたのは、この呂布がエン州を攻めたからだ。ならば、我らに何らかの報いがあつてもいいではないか。」それを聞いた張飛が、目を怒らせて呂布を睨みつけた。

「兄者は陶謙の奴がどうしてもというから、徐州の牧となつたのだ。それをどうしてお前に報いなければいかんのだ。お前のような奴はこうして連日酒食を与えてやつてているだけで充分だ。」それを聞き張遼が立ち上がつた。その手には、青龍刀を持ちいまにも張飛に斬つてかかるうという勢いである。

「あ、いや。弟が失言を。どうか、呂布に頭を下げた。それを見て劉備はここで何かあつては大変と、呂布に頭を下げた。それを見てさらに張飛は怒つた。

「兄者、何故こんな奴に謝るのだ。呂布よこの張飛と勝負しろ。俺に引き分けたらこの場は許してやる。」その言が終わるや否や、張遼が青龍刀で机を真つ二つに斬つてしまつた。

「主、辱められて、何で黙つていられよ。礼を知らぬ猪武者よ、この張遼が相手にならう。」張飛が蛇矛を、張遼が青龍刀を構え互いに睨み合つてゐる。一触即発、まさにそんな感じであつた。ところで、突如

「ハツハツハ。酔つた、いや、酔つた酔つた。」と呂布が大声で笑つた。

「劉備殿、我らは明日にでも徐州を去りましょ。」いつも噛みつかれては、ここに居られません。」それを聞き劉備は大いに慌てた。ただでさえ、曹操という強敵がいるのに、この上、呂布とまで敵対すれば徐州を治めることなどおぼつかなくなる。

「呂将軍、そう氣を悪くなされますな。將軍ほどの豪傑にこの徐州が狭すぎるのは百も承知。されど、この玄徳のため小沛の地にあつて共に徐州をお護りください。」なおも抗弁しようとする張飛を、関羽が目で黙らせる。

とりあえず呂布は小沛に移ることになつた。

## 江東の小霸王

一九二年 荆州

「ここまで順調だな。」誰にも気づかれないような声で呟く。程普（字を徳謀）彼は孫軍にあつて、智勇に優れその才で主君孫堅を補佐してきた。だが、この度の劉表攻めには反対であった。前年の戦で惨敗を喫し、多くの兵を失つた。今回は明らかにその報復戦である。

「私怨で戦をすべきではありません。荊州などいざれ手に入ります。焦つてはいけません。」そう諫めたが聞き入れられなかつた。程普は何か得体の知れない不安を感じていたのだ。しかし、孫軍は強かつた。諸城を落とし、その勢いをもつて本拠、襄陽城を囲むにいたつた。程普の心配は杞憂のように思われた。

そんなある夜、見張りが敵の逃亡兵を見つけた。何のことはない、ただの逃亡兵。だが、孫堅は自ら兵を率い、それを追つた。一軍の将のすべきことではない。程普は諫めたが、孫堅は追撃を止めなかつた。

そして、突出した孫堅は敵の罠にはまり、戦死した。

三十七歳という若すぎる死だつた。孫堅の死後、孫軍は盟友袁術を頼つた。

まだ十七だつた孫策は袁術の密将となり、孫軍の兵はすべて袁術軍に組み込まれた。

失意と絶望のなかで孫策は袁術の元で多くの功をあげた。

だが、袁術はそれに報いることはなかつた。それどころか、成人した孫策に孫軍の兵を返そつとすらしなかつた。

「クソッ。」一人、鬱憤を晴らすため、狩りをしていた孫策が喚く。

「袁術め！畜生。」近くの木を力まかせに殴りつける。

「クソッ。畜生。」何度も、何度も喚き、殴り続ける。拳から血が

滴り落ちて いるが そんなことは 気にも 留めてい ないよ うだつた。

「そん なに 大声を だした ら、誰かに 聞かれて しま いますよ。」懷かしい 声に 孫策は 耳を 疑つた。よく 通る 柔らかな 声、父の死後 聞くことのなかつた 声。

「公瑾？ 公瑾な のか。」恐る 恐る尋ねる。

「はい、伯符様。お 久しぶりです。」茂みの中から 現れた その男は、間違 いなく 周瑜（公瑾）であつた。

彼は、孫策と 同い 年の 幼馴染で「無一」の 親友でもある。

「お前、どうして？」

「そろそろ 我慢の限界だろ うと思いまして。」満面の 笑みを 浮かべる 孫策と、軽く 笑うだけの 周瑜。孫策は 周瑜を おもいつきり 抱きしめた。

「俺と、来るんだろ う。そのために 来たんだろ う。」何よりも 一番 に 聞きたかったこと。誰よりも 一番側に いてほし い奴。

「はい、伯符様に 仕えるため に。」周瑜が ゆっくりと 答える。孫策は いまだ はしゃいだ 様子のまま、腰を 下ろした。

「なあ、俺は どうすれ ばいい。お前の 策なら なんだつて のつて やる。」周瑜は 孫策の 現状を 打開すべく、策を語つた。

数日後 寿春にて

孫策は 袁術の 前に ひざまづいて いる。豪奢に 着飾つた 衣をまとい、美姫を はべらせ、玉座に ある 袁術。

「どうか、叔父を 助けるべくこの伯符に 兵を お貸し下さい。」

「うーむ、吳景か・・・あいつは 期待外れ だつたな。あれで 孫家の 親族とは な。」孫策が 唇を かみしめる。幸い 平身低頭 して いるため、袁術には 見え ない。

「袁將軍、これを。」孫策は 袋の中から 父の 形見をとりだした。

「これは、玉璽か？」袁術の 田の色が 変わつた。美姫を おしのけ 孫策に 近づく。

「もしも、玉璽を 渡すのが 憎しいと思つたら 近づいてきた 袁術を 殺してしま いなさい。」そう 言つた 周瑜の 顔を 思い出す。

（こつそこのまま殺してやるうか。）

だが、周瑜はこつも言つていた。

「ですがそのときは、伯符様は主殺しの罪をかぶることになりますが。」一瞬迷つたが、孫策は決意した。

「この玉璽を袁將軍に差し上げます。その代わりに・・・」

「つむ、よいよい。兵を返そう。」袁術は満面の笑みを浮かべて玉璽を受け取つた。

さて、玉璽である。これは秦の始皇帝がはじめて用いたもので、以後代々皇帝に受け継がれてきた金印である。

袁術はこれを欲していた。玉璽があれば、皇帝になることが可能であると思つていたからだ。それを知つていて、孫策は玉璽をかたに袁術から兵三千を返してもらつた。

五万もいた兵のうちわずか三千、袁術の強欲さがうかがえる。

ここで、揚州の勢力図に触れておこつ。袁術は寿春を本拠とし、曲阿の劉焉と敵対していた。寿春は長江の西、曲阿は東に位置する。そこで、袁術は寿春の東、歴陽に前線基地を築き、その城将を孫策の叔父吳景に任せた。そして、三万の兵をとえ横江・当利攻めを命じた。ここをおとせば、長江を渡り曲阿を攻めることができる。名将・孫堅の一族のものならそれくらい容易いだらう。そう袁術は考えていた。

だが、袁術の予想に反し、吳景は戦うたびに敗れ、一萬の兵を失つた。そこで孫策は叔父の恥をそそぎ、己が独立する拠点を得るべく歴陽に向かつた。

道中、孫策の兵は膨れ上がり、六千を越えるほどになつた。孫策はこのことに少し当惑していた。

「どうかしましたか。」その様子を見て周瑜が尋ねた。彼は智謀に長け、軍師として常に孫策の側に身を置いている。

「この兵は父上の名で集まってきたんだな、と思つてな。」

「じ不満なのですか？」

「いや。」そう答える孫策はどこか釈然としていないようであった。

「いざれ、破虜様（孫堅は朝廷から破虜将軍の位を賜っていた）ではなく伯符様、自身の名声で兵が集まるときがきますよ。」そう言って周瑜は前方へ視線を移した。

そこには歴陽の街がみえていた。

孫軍が歴陽につくとすぐに軍議が開かれた。だが、度重なる敗戦で歴陽の将は臆病になつていていた。まずは一戦すべきという孫策達の主張に対し、守りに徹するべきだといって耳を貸そとしない。

「我々は三万の兵で敗れたのだ。現在、歴陽には孫軍の兵を合わせても一万六千。これでは勝てるわけがなかろう。」呉景ら歴陽の兵はみなこのような有様で、軍議では何一つ決まりずに終わった。

その夜。

周瑜は孫策の自室にいる。酒をあおつて終始不機嫌な孫策と、側で今にも吹き出しそうになるのを抑え、肩を震わせている周瑜。

「何がおかしい。」怒氣を含んだ口調で周瑜を睨む。だが、拗ねた子供のような孫策の仕草が余計におかしく、つい声を上げて笑ってしまった。

孫策が不機嫌なのは、さきの軍議のためであった。歴陽の将が言う慎重論を無視して、横江攻めの策を進言したとき、呉景は孫策にこう言つたのだ。

「功を焦つて、兵を無駄死にさせるな。そなたは武勇に優れているが、それだけでは戦はできんものだ。それにそなたはまだ若く、経験が足りない。我々に従つていればいいのだが。」これでは、孫策でなくとも怒るであろう。

現にこれを聞き、刀のつかにてをかけたものさえもいた。もつとも最悪の事態には至らなかつたが。

「公瑾、何でお前は笑つていられる。」二人きりのときは、かつてそうであつたように一人は互いを字で呼んでいた。

「横江を陥とせば、呉景殿の対応も変わりますよ。」

「だがな・・・」そう言つて、孫策はまた酒をあおる。

「この状態でどうやって横江を攻めるんだ。叔父上の許可がなけれ

ば何も出来ないじゃないか。」と、孫策。周瑜は笑いはおさまったもの。まだ微笑を浮かべている。

「策があります。孫軍六千で横江を落とせる。」

「本當か？」孫策の表情が一変する。

（この御方は、まるで子供のようだ。）

「はい。」そう言つて、周瑜は策を語つた。もともと周瑜は歴陽の兵には期待していなかつた。士氣が落ち、厭戦気分の彼らに戦をさせても大した戦果は得られないだろう。それに孫軍全力で横江を落とせば、孫策を血氣盛んな若武者と思つものもいなくなるだろう。横江の守備兵はおよそ八千、当利は一万を越える。横江・当利互いに近い距離にある。どちらかが攻められれば、すぐに救援を送ることが出来る。だが横江を一日で落とすことができれば・・・

聞き終わつた孫策は、目を丸くしてしばらく声が出なかつた。策自体は奇抜なものではない。孫策を驚かせたのは別のことだった。（こいつ、詐欺師か。）そう思つほどに周瑜の言葉には不思議な力がある。聞いているとうまくいく、成功するそういう気になつていく。

「伯符様？」しばらく黙つていた孫策を横から覗き込むようにして彼の名を呼ぶ。

「ああ、それでいこう。明日、叔父上達にも話して、」嬉々として話す孫策をさえぎり

「伯符様、呉景殿には策の内容は話さず、独力で横江を攻める許可だけをもらつよう。」

「ん？」どうして？とこつ顔をする孫策に

「策の内容を話せば反対されるかもせんから」と周瑜。

「ああ、わかつた。」そう言つて、周瑜の器に酒を注ぐ。

「あまり酒は強くないのですが。」そう言つて辞退するが、

「いいから、飲め前祝いだ。」と強引にすすめる。（やれやれ、今夜は遅くなりそうだ）そう思い、周瑜は苦笑した。

翌日、呉景から横江攻めの許可を得た孫策は、軍議の間に諸将を集めた。

「こたび、我軍獨力で横江を攻めることになった。」孫策が開口一番に告げる。

諸将は驚きを隠しきれない。孫軍六千で横江守兵八千と戦えるのか？孫策はざわめきが収まるのを待ち、周瑜に作戦の内容を話すように促した。横江は歴陽の南に位置する。夜襲にて横江の北門を攻撃し、別働隊をして西門から場内に侵入する。その後、城内に火をつけ敵を混乱させる。これが作戦の全容だった。

「仮にうまくいっても、これではハン能（横江の守将）を取り逃がしてしまってはいけない。」と、真っ先に異議を唱えたのは程普という先代から仕えている最古参の将だった。

「ええ、確かに逃がしてしまいます。ですが、視界のきかない闇夜の中で逃げるハン能を見つけ、仕留めるには犠牲が多くります。」と周瑜。

「ならば、その後はどうするのだ。横江をおとした後、その勢いをもって当利を攻めるのか？」と、黄蓋という程普より幾分若い（といつても四十年代なのだが）将が尋ねる。彼もまた先代孫堅のころから仕えている。

「今回は、横江攻略のみで十分かと思いますが。」と、周瑜が孫策を覗う。昨夜は当利のことは話していなかつたからだ。実は、酒をたらふく飲まされてあまり覚えていないのだ。まだ少し頭が痛い。どうしてこの主は平氣でいられるのだろう。

「うむ、黄蓋の言つように当利もおとそうと思つていたのだが、公瑾何か考えがあるのか？」

「いえ、そうではないのですが、当利攻めでは景殿にも加わってもらおうかと思いまして。」

「うむ。そうだな。その方が叔父上達も喜ぶだらう。」そう言つて、孫策は周瑜の策を採用した。

雲ひとつない夜空の下で、その一軍は月と星の明かりを頼りに、静々と横江へ進軍していた。

先陣は歴戦の将、程普。孫策は周瑜と共に中軍にいる。別働隊の将

には黄蓋が選ばれた。

彼は選りすぐりの兵と共に、西門近くで息を殺し『とき』を待つて  
いた。しばらくすると北門の方が騒がしくなってきた。

はじめた。黄蓋には、篝火が北門に向かつて動き出すのがはつき  
りと見えた。

見張りの兵が北門に集中していく。

と、黄蓋が笑みを浮かべた。兵が不信がる。合図なのか？  
いや、違う。

彼はふと思い出したのだ。この策をたてたのが、まだ若い青年だつ  
たことを。（久しぶりだな、戦場にでるもの。）

鼓動が高鳴つていぐ。長年の経験がいまが『そのとき』である」と  
を教えてくれる。

「よし、いまだ」その声と共に数十名の兵が城壁をよじ登る。

「何なのだ、この軍は。」横江の守将ハン能は城壁の上で直接兵を  
指揮していた。暗闇の中で、これほど進退の際立つた部隊があるだ  
ろうか。一気に攻めたかと思うと退き、他の隊と交替する。兵が疲  
れる前に退くので、常に強攻できる。

「これが、孫軍なのか？歴陽の景とは比べものにならない。」驚  
きながらも、この横江をあとには兵が少なすぎる。そう思つてい  
たハン能の元に、部下が血相を変えてやってきた。

「申し上げます。敵が西門から侵入。敵は城内に火を放つた様です。  
」ハン能は眉をしかめた。

「西だと？北は陽動か。」一瞬考えたのち、ハン能は撤退の命を下  
した。孫軍は見事勝利し横江を得たのだ。

## 袁術の将

横江陥落の報せは、すぐに袁術のしるところとなつた。

「孫策め、やりおるわ。さすが孫堅の息子よ。」そう言つた袁術は我がことのように喜んでいた。袁術は孫策のことを未だ己が臣と思つてゐるのだ。

そして、袁術は家臣たちの危惧も知らずに、有る事をなそうとしていた。孫策が兵を借りるときに、質として渡した玉璽を使って帝になろうと/or>のだ。名門袁家の血を引く自分こそが新皇帝にふさわしいと、そう思つてゐるのだ。強欲な袁術の考え方そのものである。数日前、側近の袁胤に諮つたところ時期尚早と諫められた。だが、揚州を支配下におけばそれも可能だと思つてゐる。

家臣たちは恐れていた。袁術が帝を名乗つたとき、逆賊討伐の名分をえた孫策が、名実共に袁術から独立することを。そこで彼らは、袁術の臣をよそにむけよつとしたのだ。即ち、徐州攻略である。

その部屋には、二人の男がいる。がつしりとした体のいかにも武人といった男と、瘦せた官吏風の男。

「どうするのだ。これでは孫策にやられるのをまつてゐるようなものではないか？」豪快に酒を飲みほした武人風の男が言つ。口髭に酒の滴がついているがそれを気にもとめない。そして、いかにも荒々しい太い声の彼の心中が、主を思う心で満たされているということをしる者は少ない。袁術の臣で真に袁家を思うものはどれほどいるだろうか。恐らくここにいる一人だけではないか？

「分かつております。だからこそ徐州攻略なのです。」官吏風の男が空になつた器に酒を満たしてやる。

「だが、徐州には呂布がいるではないか？」呂布はamp;#20823;州の戦いの後、徐州の劉備を頼りいまは、徐州の小沛という町で劉備の世話をなつてゐる。

「將軍は呂布のことを気に入っていたのでは？」

「あの虎牢関の戦いをみて呂布に憧れぬ武人はいないわ。」と言つて、また酒を飲み干す。よほど酒豪のようだ。

「さようでござりますか。此度はその呂布と共に戦うのです。」

「呂布と？」武人風の男が聞き返す。

「つましくいくのか？」

「呂布にとつても悪い話ではないはずです。それに、あの呂布がいつまでも小沛でくすぶつて居るとも思えません。」

「それで、領地はどうする？」

「半分ずつにすればよろしいでしょう。」なんとも大雑把だが呂布相手ならその方がいいと思える。

「將軍？」

「ああ、袁胤殿すぐに殿に裁可を。これは、孫策が劉&amp;#32327;を破る前にせねばならぬぞ。」はい、と頷いた後、官吏風の男・袁胤は部屋を去つた。

「殿のためならばこの命惜しくはない。」そう言って、酒を飲んだ男の目には確固たる意志が宿っていた。男はかつて、袁術に助けられその恩に報いようと袁家に仕えている。男の名は紀靈。自他共に認める袁術軍最強の将である。

横江をおとした孫策軍は瞬く間に当利を陥落させた。やらず、勢いを得た孫策軍は次々に砦をおとし、遂に劉ヨウの本拠地曲阿に迫った。

だが、曲阿は今までのよつに簡単におちるとはなかつた。それは、城壁が堅固だつたわけでもなく曲阿を守る兵の士気が高かつたわけでもない。たつた一人の武将によつて、孫軍は苦戦を強いられているのだ。

「あいつはいつたい何者なんだ？」と、孫策が喚く。ここ周瑜の幕舎のなかには周瑜と孫策の二人しかいない。

「どうやら新参者みたいですよ。太史慈といつ名のようです。」二人はここ数日苦戦を強いられている敵将の話をしている。

彼、太史慈は、あるときは城壁の上にたち巧みに兵を指揮し、またあるときは城外にて孫軍を蹴散らし悠然と城内に戻つていく。巧みな用兵と勇敢な突撃は、敵味方の知るところとなり彼が戦場にいるだけで孫軍の兵は怯えだすありさまである。

「公瑾。何かいい策はないのか。」

「曲阿をおとす策ですか。それとも・・・」

「両方だ。俺はあいつが欲しい。」周瑜は軽く笑みを浮かべる。(

確かに伯符様の好きそつうな将だ。だが、どうする・・・)

「どうも太史慈といつ将はあまり重用されていなによつですね。」

「劉ヨウは阿呆か。」吐き捨てるように言つ。

「恐らく、太史慈はこの戦で功をたて劉ヨウの信頼を得よつとするはずです。そこをつければ太史慈を捕えることはできましょ。」

「俺の臣にはならないと?」孫策がふてくされたように言つ。

「やり方が少々汚いので。それに劉ヨウへの忠義もなかなかかど。」

「どんなやつだ。」孫策が促す。

「伯符様には太史慈と一緒に討ちを演じてもらいます。そして、わざ

と負けたふりをして太史慈をおびきよせて下さい。」

「その後、捕えるのか。」孫策は不満げな顔をしている。策の汚さからか、それとも演技とはいえ負けたふりをするのが自尊心を傷つけるからか。

「俺は太史慈を気に入っているのだ。そんな手は使わん。」

「では、ご自身で太史慈を捕えると?」

「ああ。」当然だといわんばかりに頷く。

「それでは小隊の長にすぎません。」

「何だと!」孫策は卓にこぶしをたたきつけ立ち上がった。周瑜はそれを冷静に見ている。孫策の短気にはもう慣れている。

「俺は、俺のやり方で太史慈を味方につける。お前には俺の気持ちが分からぬんだ。」そう言って孫策は幕舎を出ようとすると、周瑜は気づかれないようにそつとため息をつき、孫策を呼び止めた。

「伯符様。あなたは何者です。」孫策は周瑜に背を向けたまま答えるようとしない。

「あなたは孫軍の長なのですよ。」

「分かつていい。」ボソッとつぶやいたその声はかすかに周瑜の耳に届いた。仏頂面をした孫策を容易く想像できる。

(全くこのお方は)周瑜は苦笑した。(それを許してしまつ私も私なのだが。)

「しようがないですね。」

「えつ」孫策が周瑜に笑顔でふりかえる。

「自分より強いと思つたら迷わず逃げる」と、それとこちらが危険と感じたら加勢に出ること。この一つを許してくれば。」

「いいのか?」孫策は周瑜の言葉を最後まで聞かず、つい身を乗り出した。

「はい。伯符様の思つままに。」

「本当だな。」

「はい。」それを聞いて満面の笑みを浮かべる。

「ただこれだけは覚えておいて下さい。無謀は武勇に非ず、時と機

を得るものこそ名将であると。

「わかつた。心しておく。」

翌日、孫策は単騎城外にて太史慈に一騎討ちを申し込んだ。

城壁の弓兵が慌しく動き出し、南門に集結する。

「どうした太史慈膽したか。」じれた孫策が再び吼える。城壁の上の弓兵が一斉に弓を構える。太史慈はまだ出でこない。

（劉ヨウはこの弓兵で決着をつけるつもりなのか。いくら殿でもこれだけ多くの矢ならかわしきれない。）周瑜に不安がよがる。やはりやめておくべきだつたか。後悔して己の主を信用しきつてない自分の心を恥じる。

（やはり私には分からぬのか。策をたてそれに喜びを感じる私は。）昨夜の孫策の言葉を思い出す。

はつきりと、お前には俺の気持ちが分からぬ。そう言われた。確かに、あの時太史慈を味方にすることより、城をおとすことのほうが優先だと思っていた。そのために太史慈をおびき出すことはあつても、仲間にしたいとは思わなかつた。

周瑜はふと笑みをもらした。苦笑といつていいだらう。（よくこれで軍師が務まるものだ。主のために最善の策を立てるのが軍師の役目だらうに。）

そして、周瑜は先代から仕えている三人の将を呼んだ。最古参の程普、用兵・武勇に優れる黃蓋、そして弓の名手韓當。彼らは孫軍の中でも歴戦の将として称えられ、皆それぞれ一軍を率いる力量がある。

「もしこのまま太史慈がでこなかつたら、程普殿と韓當殿は東西より曲阿を攻めてください。黃蓋殿は数百の突撃隊の将となり殿が無事退却できるよう援護願います。」

三人はそれぞれ頷いた後、持ち場へ戻つていった。本来なら程普が指揮をとるべきであろう。だがこの三人は、今までの戦すでにこの若き軍師の才を認めていたのだ。だからこそ素直に周瑜の言に従つたのだ。ただひとり、程普は苦い顔をしていたが。

「頼もしいですな。我が殿は。」と、黄蓋。

「全く。あの太史慈と一緒に討ちを望むとは。」と韓当。それに対し

て程普は浮かぬ顔である。

「程普殿。また周瑜殿のことか？」程普が周瑜を嫌っていることは軍内では知らぬものはない。

「またとはなんだ。またとは。だいたいこのように若を危険なめにあわせようとは・・・」

「若ではなく、殿ですよ程普殿。それにこれは殿の望みでしょう。と韓当がなだめる。

「しかし、何故あのように冷静でいられるのだ奴は。」

「信じているからではないのですか。殿が負けるはずはないと。」と黄蓋。

「儂とて信じてはいる。だがな・・・」

「黄蓋殿、程普殿そろそろ持ち場に着かないと。」韓当が話をきりあげる。程普はまだ不満があるようであつたが。いつまでも愚痴るわけにはいかない。

周瑜の心配は杞憂にすぎなかつた。太史慈が挑戦に応じたのだ。太史慈はつやのいい白馬に跨り、通常の一倍ほどの太さのある槍を片手に悠々と馬をすすめてきた。孫策はその様をみて、改めて太史慈が欲しいと思つた。そして孫策は矛を交える前に

「太史慈よ、俺の部下にならぬか？」と叫んでしまつた。その声は孫軍の陣営にも、曲阿城内までにも聞こえる大声であつた。それを聞いた周瑜は己の額に手をあて大きくため息をついた。太史慈は馬をすすめ槍の穂先を孫策にむけ、断ると叫び返した。

それが、二人の勝負の始まりだつた。太史慈は己の獲物を振り回し果敢に攻撃してくる。孫策は巧みな手綱をばきでそれをかわし、太史慈を口説き続けた。

「そんなに劉ヨウがいいのか。俺ならもっとお前を高く評価するがな。」

「先頭きつて敵陣に突つ込むような男に誰が仕えるか。」互いに槍を繰り出し相手の出方をつかがつていてる。

「俺に劉ヨウほどの器を見出せないか？」

「フツ。よほど自信過剰な男のようだ。」

「それはそうだろう。でなきやこうやつてお前を口説いたりはしない。」そう言って、孫策は白馬めがけて槍を突き出した。太史慈は己の獲物でそれを防ぐとする。（フツやはりな。この白馬、太史慈の馬じゃない。）孫策は何度目かの攻撃でそれを確信した。受けた防ぐより、よけて反撃に転じるほうが動きに無駄がない。だが、太史慈はそれをしなかつた。やつは決して馬術が下手なわけではない。

ならば、何故。

簡単なことだ。劉ヨウの阿呆が、見た目だけの駄馬に乗るように命じたのだ。勝ち負けよりも、体裁を重んじて。

「太史慈。俺のところへ来い。」孫策はもう一度叫んだ。だが、太史慈は返事をしなかつた。構わず、つづける。

「江東を制したら、俺は中原にでる。太史慈お前が必要なんだ。」数合で太史慈は気付いていた。この馬では孫策の素早い突きには耐えられないと。そして、孫策もそれに気付いているだろうことも。なら、何故。決まつていてる。

俺を生かすためだ。（全く俺もついてない。）太史慈は劉ヨウを裏切るつもりはなかつた。一度決めた主君に終生忠義を尽くす。それが大丈夫たるものだから。

一騎討ちは日暮れまで続き、勝敗の決することなく終わつた。その夜。

「殿、明朝曲阿に総攻撃を仕掛けましょ。」

「そうです。この勢いがあればた易いでしょ。」

「殿の勇姿を見て兵の士気も上がつております。」

大将の一騎討ちで皆昂揚しているのか。積極論が飛び交う。孫策は周りの将をみて、そして最後に周瑜の顔を覗い見た。その表情に反

対の色はない。孫策はふと疑問に思つた。いつもなら反対するだらう。」

軍議をおえ孫策は周瑜の幕舎を訪ねた。

「お前らしくないな。力攻めに賛同するなんて。」

「たまにはいいのでは。曲阿をおとせば太史慈も降伏するでしょうし。」

「ああ、あいつが加わればもっと強くなる。江東を制し、父上の仇を討つんだ。」

そう話す孫策に周瑜は眉をしかめた。

（伯符様は焦つておられる。破虜様の死にこだわりすぎているのではないか。破虜様の仇を討ち破虜様が強かつたことを証明したいのではないか。）そんな周瑜の不安をよそに孫策はつづける。

「必ずこの手で父上の雪辱をはらすのだ。」孫策が熱っぽく語る。顔が赤いのは酒のせいではないだろう。

「なあ、公瑾できるだろ。荊州を奪つて父上の仇を討つ。」

「ええ、もちろんです。」そう言って周瑜は笑顔を見せた。

長い夜はふけ、朝を迎えるとしていた。孫軍はこの日、曲阿に総攻撃をかけた。数時間の激戦の後、劉三ウの戦死という形で戦闘は終結した。

もはや、曲阿陥落はさけられないとみた劉三ウは数名の護衛と共に脱出を試みた。だが、発見され雑兵の手によつて殺された。太史慈はといふと。孫軍の多大な犠牲によつて捕えられた。

「なぜ殺さない。」孫策の前につれてこられた太史慈は、すぐにそう叫んだ。孫策は答えず笑顔を見せ、自ら縄をほどいてやつた。太史慈の腰には短刀が納められている。それははつきりと孫策の目にもみてとれた。

だが、孫策は丸腰のまま太史慈の前にいる。まるで、俺を殺したければ殺すがいい。と言わんばかりに。

そして、太史慈がそのことに気付くまでさほど時間はからなかつた。

（全くこの御人は。）顔にはださず、心の中で驚いた。  
（俺の負けだ。）そう思つた太史慈は孫策に忠誠を誓つた。  
「」の太史慈、命尽きるまで孫策様にお仕えします。」と。

太史慈（後書き）

このあと、遂に呂布が登場します。  
かなり久々ですがそれほど暴れる予定はありません。  
呂布の強さが明らかになるのはもう少し先になります。  
どうぞ、お楽しみに。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3849f/>

---

三国志 呂布伝

2010年10月9日21時15分発行